

特別講座「宗像学」の報告 2

北濱 幹士*・宮川 幹平*・八尋 剛規*

(受付 2017 年 10 月 7 日)

(受理 2017 年 11 月 25 日)

Report on Special Lecture “Munakata 2”

by

Kanji KITAHAMA*, Kampei MIYAKAWA*, Takeki YAHIRO*

Abstract

This report is continuous study of the Special Lecture “Munakata” that was reported in proceeding of the Tokai University Junior Colleges Vol.50.

Munakata city and Fukuoka prefecture aim to register “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata” for the 21st UNESCO World Heritage site in Japan.

The purpose of “Munakata 2” is for the students as fieldworkers to visit and research some shrines and tourist spots in the island of Oshima as a part of the Munakata. In cooperation with Munakata City Hall, through this fieldwork, the students are supposed to learn some technical skills of regional study and active learning.

Keywords : Reginal Study, Educational System, Active Learning

1. はじめに

特別講座「宗像学」は、東海大学福岡短期大学（以下本学）内において 2016 年度より複数教員による共同プロジェクトとして始まった。その目的は、学生らが自分たちの生活する地域のひとつである宗像に関する知識と経験を得る事にある。

第 1 回目「宗像学」は、学生らが宗像とその世界文化遺産登録に関しての知識をさらに深めると共に、実在の場所を訪問する経験を得る事に主眼を置いて開催した。2016 年 7 月 9 日に宗像大社（辺津宮本殿・拝殿、高宮祭場、第二宮、第三宮）、海の道 むなかた館、及び宗像市田熊石畑遺跡歴史公園（愛称：いせきんぐ宗像）を学生 8 名（男子学生 4 名、女子学生 4 名）、及び引率教員 2 名（筆者 2 名）にて訪問した（詳細は既報¹⁾にて）。

第 2 回目「宗像学」は、2017 年 6 月 18 日を実施日とし、「大島の魅力と課題に関するフィールドワーク」と位置付けし、実際に大島へと渡り、その魅力と課題を様々な観点から（環境、観光、健康、周遊等）探索する事とした。また、それらの探索成果となるコンテンツ（映像・調査記録等）を収集し、本活動で得られたコンテンツは、今後の大島に関する研究や実践活動に寄与するようまとめ、関連機関組織等に提供可能なものを作成する事とした。

参加希望者を募って実施した前回と異なり、今回は情報処理学科のプロジェクト研究Ⅱ（但し参加は全員ではない）、国際文化学科のゼミナールⅢ、プロジェクト活動Ⅱの共同プロジェクトとして実施した。

本稿は、第 1 回の「地域を学びの拠点とし、地域に根差し、密着し、共に学生を育て、郷土愛を醸成する高等教育機関の取り組み事例」を基に、今回は行政との連携も加えた取り組み事例のひとつとして報告を行う。

2. 宗像市大島の概要

宗像市大島²⁾は、福岡県内で一番大きな島であり、筑前大島とも呼ばれている。1889 年（明治 22 年）に宗像郡大島として村制を施行し、2005 年 3 月 28 日に宗像市に編入された。宗像市本土より北西に約 6.5 km に位置している。大島は、地島・沖ノ島と共に玄界灘と響灘を分ける島であり、大島の西側が玄界灘、東側が響灘である。大島には宗像大社中津宮（以下、中津宮）、そして宗像大社沖津宮遙拝所（以下、沖津宮遙拝所）があり、古代よりお社を守る島としての伝統が残っている。

大島への交通手段は、本土側の神湊港と大島東の大島港の間を宗像市営渡船が運航しており、フェリー「おおかぜ」が 5 便（所要時間約 25 分）、旅客船「しおかぜ」が 2 便（所要時間約 15 分）である³⁾。島内の移動手段は、タクシー（1 台）、巡回観光バス⁴⁾、レンタル電動アシ

スト自転車である（大島港前に軽自動車のレンタカーが露店営業）。本土より自動車・バイク・自転車等の持込も可能であるが、フェリーそのものが観光船では無く、島民の移動用と位置付けされており、自家用車を乗船させる人は少ない。また、離島ならではの交通手段として、海上タクシーもある。

島の人口は701人（2015年3月末日現在）と1950年（2,136人）より減少の傾向が著しい。また、高齢化率43.9%と急激に高齢化が進んでいる島でもある。

大島小学校・中学校⁵⁾は、小中併設校として離島・小規模校・小中一貫での教育が行われている。生徒数は、小学校が31名（男子：15名、女子16名）、中学校は17名（男子：10名、女子7名）である。中学校の課外活動では、伝統的にバレーボールが小学校や社会体育と連携して盛んに行われている^{*1}。

表1 大島（筑前大島）の概要

面積	7.17 km ²
周囲	約15km
最高標高	御嶽山 224m
島内道路	県道10km, 市道約50km
特徴	島の面積の約半分が丘陵地 交通量が少なく信号は未設置 民家は島の南側に集中
気候	周囲が海に囲まれ温暖
周囲	約5km 東に地島（じのしま） 約6.5km 南に九州本土（神湊） 約49km 北に沖ノ島



図1 大島概要²⁾

3. 特別講座「宗像学2」の授業プラン

(3-1) 実施方針

本フィールドワークの参加学生は、プロジェクト研究II（情報処理科）の学生8名（男子6名、女子2名）とゼミナールIII（国際文化学科）の学生6名（男子3名、女子3名）、プロジェクト活動II（国際文化学科）の韓国人交換留学生3名（女子3名）の合計17名、及び引率

教員3名（筆者3名）と学科の枠を超えたフィールドワークとなった。その共通する目的は「大島」に関するコンテンツを様々な観点から見出すことであるが、後述するように、学生の参加形態や目標は様々である。このことを踏まえ、フィールドワークの共通構成として、午前中に、世界文化遺産登録に関する箇所（中津宮、御嶽山展望台（御岳神社）、沖津宮遥拝所）の訪問を組み込む一方、午後は2つのグループ（①自転車による周遊、②バスによる周遊+環境調査）に分かれ、それぞれの目的に基づいて行動することとした。

(3-2) 実施準備とその体制

本フィールドワークを実施するにあたり、参加学生が一堂に会するような、全体の事前指導は実施せず、参加学生がそれぞれ受講する科目での指導（約3週間）を通じて行った。その理由としては、日程調整の問題のほか、科目における本フィールドワークの位置づけや、参加学生に求める事前準備の内容などが、それぞれ異なることが大きい。

表2 各科目での本フィールドワークの位置づけ

<p>プロジェクト研究 II（情報処理科）</p> <p>本フィールドワークでの活動をもとに、大島の魅力・課題を明らかにする映像作品を制作・完成させることを目標とした。事前活動として、大島に関する基本調査と取材対象の検討を課し、特に漂着ゴミ問題に関する基本理解を深めさせた。</p>
<p>ゼミナール III（国際文化学科）</p> <p>本フィールドワークを通じて、大島の観光地としての可能性や課題を総合的に検討した提案レポートを制作することを目標とした。各学生の主体性を尊重し、事前調査よりも、当日の活動計画立案を重点的に実施させた。</p>
<p>プロジェクト活動 II（国際文化学科）</p> <p>日本を訪れる韓国人観光客の目線から、大島の魅力と観光地としての可能性・課題に関するレポートを制作することを目標とした。特に韓国人観光客を迎え入れる事を前提に、情報や案内の充足を確認するよう指導した。</p>

このようにフィールドワークに参加する背景や実際に求める活動が異なり、かつ、事前活動でも共に行動することがないままフィールドワーク当日を迎えることは、当日の行動における一体感を損ね、有益な相互協力が得られないことが懸念された。

そこで、本学が運用する学習管理システム Moodle において、本フィールドワーク専用のコース「宗像学」を開設し、各自の活動状況（各自の目標・事前調査結果・活動への要望／懸念・フィールドワークで得た知見等）の書き込みやほかの学生・教員の書き込みに対するコメント（フィードバック）を行えるように設定した。つま

り、各自の事前活動とそのフィードバックを各正課授業に閉じないようにする仕組みを導入し、フィールドワーク全体をeポートフォリオ活動として構成することを企図したのである。なお、その機能実現のために用いたモジュールはeポートフォリオ「一筆柿右衛門」⁶⁾である。本モジュールはMoodleプラグインとして機能し、スマートフォンからの利用にも最適化されている。本学学生はMoodleの利用には習熟していることから、本フィールドワークにおいてeポートフォリオ活動となすことの技術的ハードルは低いと見込んだ。

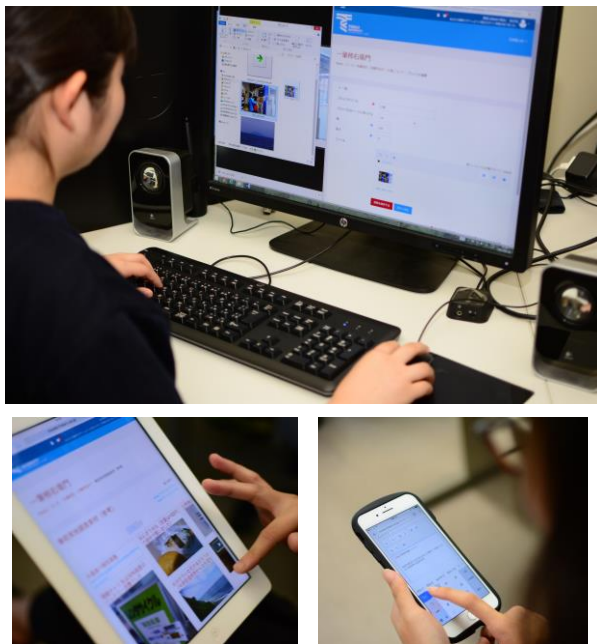


図2 eポートフォリオモジュール利用風景

実際、これらの書き込みや相互フィードバックの状況を参考として、各学生の興味関心に関する情報を教員側で集約し、前項で示したような全体的な活動計画やグループ行動の案をまとめることができた。具体的には、上述した3つの正課科目からそれぞれの興味関心をもとに、2グループに再編することとなったのである。一方、eポートフォリオの利用状況は学生によって大きな格差があった。特に韓国からの留学生についてはシステムのUIが日本語である上、Moodleに慣れていないことがわかり、無理に利用させるべきでないと判断した。利用が少ない学生については、各教員が個別に状況を確認するなどして、活動全体への影響を少なくするよう配慮した。

そのほか、当日までのリアルタイムコミュニケーション用にLINEグループを開設し、各参加学生に登録を呼びかけた。LINEの利用はほぼすべての学生が習熟しており、活発な利用が見られた。

〈3・3〉 行政・その他学外組織との連携・協力

本フィールドワークを実施するにあたり、地元宗像市との密接な連携を図った。まず事前計画の段階では、世

界文化遺産の構成資産に関わることから、同市の世界遺産登録推進室と相談し、宗像市や地域として望むことに関する調査や、何がどこまで実施可能であるかの検討、地域関係者・宗像大社等との調整を行った。また、フィールドワーク実施にあたっては、世界遺産登録推進室職員による世界遺産関連施設の解説を実施したほか、市バスの無償貸与やトラックによる回収ゴミの運搬など、宗像市からの全般的な活動支援を受けた。

そのほか、宗像市との市民協働事業として「むなかた電子博物館」を運営する「むなかた電子博物館運営委員会」と相談し、同博物館の大島特集サイトの制作と、本フィールドワークのコラボレーションを図ることとなった。具体的には、本フィールドワークの日程に合わせて実施される同博物館による取材活動（ドローンによる空撮を含む）の同行・見学のほか²⁾、同博物館による取材データの提供、本フィールドワークの成果である大島に関する学生制作コンテンツの同博物館での掲示などが取り決められた。

その他の学外組織との協力としては、世界文化遺産登録前、行政と大学の連携フィールドワークと言う事などにより、西日本新聞社記者³⁾による同行取材を受けた。また、学園内の様々な活動を紹介している東海大学新聞の記者⁴⁾は、集合から解散に至るまで学生と一緒に参加して頂いた。その同行取材記事は、2017年7月1日発行の東海大学新聞、Campus Lifeの欄に掲載された。なお、フィールドワーク実施翌日（6月19日）の西日本新聞に掲載された本フィールドワークの記事を見た日本経済新聞社⁵⁾より取材の申し込みを受け、その記事は2017年7月5日に掲載された。

4. 実施内容

大島での活動は、参加者全員での世界文化遺産登録関連箇所を午前中に訪問し、沖津宮遙拝所の近隣の民宿で昼食を取り（4・2バス周遊及び環境調査参照）、午後は移動手段を基に、自転車での周遊とバスでの周遊グループを形成した（表3参照）。各活動の詳細は下記にて報告する。

表3 「宗像学」実施概要

時間	全体概要
8:00	JR 赤間駅南口ロータリー集合 ・出発
9:25	フェリー「おおしま」@神湊港発
10:15	世界文化遺産登録関連箇所訪問 中津宮→御岳山展望台（御岳神社）→沖津宮遙拝所
12:00	昼食@民宿まなべ
13:00	グループ別行動 ・自転車での周遊 ・バスでの周遊（北部海岸環境調査/清掃活動含む）
17:30	大島渡船ターミナル集合
18:00	フェリー「おおしま」@大島港発
19:00	JR 赤間駅南口ロータリー解散

〈4・1〉 世界文化遺産登録関連箇所の訪問

大島上陸後、中津宮（御嶽神社）、御嶽山展望台、沖津宮遙拝所を宗像市役所世界遺産登録推進室担当者*6の説明を受けながら訪問した。このうち2ヶ所は、世界文化遺産登録された8つ内の構成資産である（世界文化遺産に登録されたのは、本フィールドワークを実施した3週間後である）。

宗像大社中津宮は、天照大神の御子神である宗像三女神の柱湍津姫神（たぎつひめ）が祀られている。境内には「天の川」が流れており、川を挟んで牽牛社と織女社がある。旧暦の7月7日に近い8月7日に行われる七夕祭は中津宮で最も盛大な神事である。本殿裏手から御嶽山へと参道が続いており、御嶽山山頂には御嶽神社が築かれている。また、山頂には展望所があり、天候状況が良ければ沖ノ島を望む事ができる⁹⁾（残念ながら当日は快晴ではあったが、霧がかかり見る事ができなかった）。

第1回宗像学で訪問した辺津宮（市杵島姫神 いちきしまひめ）、そして中津宮（湍津姫神 たぎつひめ）と続き、最後に沖津宮（田心姫神 たごりひめ）を訪問したい所である。しかし、沖津宮がある沖ノ島は、「神宿る島」と呼ばれて信仰されており、一般人の立ち入りどころか渡島する事も許されていない*7。その為、大島北部海岸の高台に沖津宮遙拝所が設けられている。沖津宮遙拝所は、沖津宮（沖ノ島）を「遙か遠くから拝む」事を目的として設けられている。沖津宮遙拝所手前の石碑によると、沖津宮遙拝所は18世紀中頃より沖津宮の拝殿の役割を果たしている⁷⁾。



図3 沖津宮遙拝所にて

〈4・2〉 自転車での周遊

今回自転車を利用したのは、男子学生5名、女子学生1名、引率教員（男性）1名である。男子学生5名はロードバイク、女子学生と引率教員は電動アシスト自転車を利用した。ロードバイクは学生所有物をフェリーで島に渡し、電動アシスト自転車は島の観光案内所でレンタルした。電動アシスト自転車のレンタル料金は1日500円であり、国内の平均相場よりも破格の料金設定となっている。宗像市の担当者によれば、これは島内のバスが1

日フリー乗車で700円と設定されているため、それよりも価格を下げたとのことである。

島内には主要観光スポットや景勝地を周遊する定期バスが観光客向けに運行されており、このルートが主な観光コースとなっている。そのほかの観光スポットについては、狭窄道路も多くバスルートが設定されていない。また、このほかの観光ルートとして、「九州オルレ宗像・大島コース」として島内にコースが設定されているが、徒歩を前提としているコースであり、難易度も中・上級用となっている。このため、若者にとっての最も手軽な観光手段は自転車ではないかと考え、自転車による島内ツアーを試みることにした。

引率教員が事前に島を訪問し調査した結果、学生の体力、訪問時間、費用、自由度の面から自転車での移動も十分に可能性があると考えた。島内の周回道路は狭窄道路であるが舗装されており、他の交通車両も少なく、自転車での走行は問題ない。島内の道路はアップダウンがあるため、体力に自信のある学生には通常のロードバイク、女子学生と引率教員は電動アシスト自転車を利用した。

今回設定したコースは、島北部にある沖津宮遙拝所から反時計回りに島南部の大島港までの総計10.4kmである。平坦な部分はほとんどなく、コース全域でアップダウンとなる。具体的には、沖津宮遙拝所から砲台跡・風車展望所への2.3km（主に上り、標高0mから163mH地点へ、所要時間20分）、砲台跡から大島灯台への2.3km（主に下り、標高163mHから30mH地点へ、所要時間7分）、大島灯台から津和瀬への2.2km（主に下り、標高30mHから70mHのピークを通過し0mH地点へ、所要時間7分）、津和瀬から大島港への3.6km（峠超え、0mHから100mHのピークを通過し0mH地点へ、所要時間13分）、途中観光スポット・景勝地を巡り休憩しながら、走行時間50分弱（休憩時間、観光時間を除く）のコースである。このコースは事前（宗像学実施の3週間前と1週間前）に筆者らが2回に分けて下見と試走を行なっている。

バス利用に対する自転車利用の優位点としては、コース途中の様子を細かく知ることができること、時間設定が比較的自由にできること、達成感が大きいことなどが挙げられる。実際、休憩を兼ねた景勝地に到着するたびに歓喜の声が聞かれた。

自転車移動時は、アクションカメラ2台（SONY FDR-X3000及びGoPro Hero5 session）を引率教員及び学生の自転車にマウントし、全行程を動画で記録した。GPSによる位置情報を含めた記録動画（移動経路や速度が同時に表示される）を学生が閲覧できるようにし、振り返りができるようにした。



図 4 振り返り用のビデオ

実施後に得られた参加学生からのコメントには、次のような実体験に基づく意見が見られた。

- ・カーブや落石箇所が多く、スピードを出していると危険な箇所が数箇所あり、カーブミラーの設置や標識の設置が必要
- ・休憩場所（水分補給のための自動販売機）がコース途中に皆無であり、整備が必要
- ・高低差によりロードバイクでは体力的には厳しく、電動アシスト自転車の利用がベスト
- ・自転車を利用することにより、全身で自然を体感できた

また、その後の学生への聞き取り調査で「自転車での島内観光は勧めるか？」の問いに、ロードバイクで周回した学生はいずれも「勧めないが、電動アシスト自転車であれば勧める」と回答している。また、電動アシスト自転車を利用した女子学生は、1ヶ月後に大島を再訪問した際にも「電動アシスト自転車をまた利用したい」との希望であった。

宗像市もレンタル自転車利用に関する具体的調査データを持ち合わせていないようであり宗像学実施後に、本自転車部隊から意見・感想を聴取し、その結果、島内でのレンタル自転車を増台する方向で検討が行われることとなった。

〈4・3〉 バスでの周遊及び環境活動

このグループに参加したのは、男子学生4名、女子学生7名、引率教員（男性）2名である（うち、教員1名は緊急事態に対処するため、本学所有の学用車でバスに追随した）。まず、北部海岸にて環境調査及び清掃活動を行った後、①砲台跡、風車展望所、②大島灯台、馬蹄岩、③つわせ海岸、④安昌院（一部学生教員のみ）を巡った。

午後の活動の最初は、沖津宮遙拝所付近海岸における環境調査及び清掃活動である。大島の海岸には、日本や近隣諸国からと見られる漂着ゴミが広範囲に渡って残されており、一部地域ではその回収清掃もままならない状況にある。その状況は筆者らが本活動実施前に事前調査を行い、eポートフォリオにも掲載して学生への周知を

図っていた。さらに、世界遺産の構成資産である沖津宮遙拝所から沖ノ島を望む際、眼下に漂着ゴミが溢れる状況を学生自身に確認させた上で、1時間程をかけ、東西約300mの清掃活動を実施した。なお、環境問題に関心を持つ学生には、どのようなゴミが多いか、どこどの国・地域由来のものが多いかなどを写真等で記録するよう指示した。回収した漂着ゴミは、宗像市の指導のもと分別を行い、2トントラック1台に積載された。



図 5 環境調査・清掃活動

次に訪れたのは、沖津宮遙拝所より西よりの島北部に位置している砲台跡と風車展望所である。海が幅広く見渡せる位置にあり、明治初期より防衛の拠点として昭和11年には砲台が設置され、昭和20年には砲兵部隊が配備されていた⁸⁾。現在は、砲台が配備されていた厚いコンクリートの基礎のみが残っている。また、砲台下には海上の動きを確認する観測所がある。観測所内のコンクリートの合間から見る海上景色は、別の雰囲気が醸し出される。風車展望所は、砲台跡の目と鼻の先に見えるが、展望所へ行く為には、一度砲台跡から坂を下りてから再度登らなければならない。小高い丘の上に設置されている赤い風車は、まるで映画のロケ地のようなものである。また、風車展望所までの道路脇にはコスモスが植えられており、赤い風車を惹きかたてている⁹⁾。



図 6 北部海岸線を望む（砲台跡、風車展望所付近より）

小高い丘の上にある砲台跡・風車展望所から海辺へと下りると大島灯台・馬蹄岩がある。その大島灯台の入口手前より海岸近くの馬蹄岩へと下りる道が存在している。しかし、その道は整備されている道ではなく、ややもすると「けもの道」である。その草が生い茂った道を抜けると、眼下には素晴らしい海岸の景色が広がる。その海岸へと下りる1ヶ所に馬蹄岩がある¹⁰⁾。馬蹄岩へと下りる道と同じ場所に三浦洞窟へと下りる道もあるが、下り上りが続くため、当日の天候、学生の体力を踏まえ速やかに次の箇所へと移動した。

砲台跡・風車展望所、そして大島灯台及び馬蹄岩がある大島北西部から西側を周遊して行くと、唯一島西部の海岸沿いに出る事ができる。そこが津和瀬(つわせ)である。港、民宿、公衆トイレ等があり、海岸では海水浴も楽しめそうである。

津和瀬で一旦海岸沿いへと出る県道541号線は、海岸線を離れ、山々の間を走り抜け、中津宮の裏を通り、島のメイン通りへと通じている。大島市街はバスで周遊する場所ではない為、市街地で下車し、徒歩にて安部宗任の墓がある事で有名な大島唯一の寺社でもある安昌院を訪問した。大島で暮らす人から話を聞く機会を持つために、安昌院へは事前にアポイントを取っておいた。住職からは、大島の歴史、暮らし、世界文化遺産登録に関して地元の意見などを聴くことができた。

最後に、今回のフィールドワーク参加者が楽しみにしていた食事処について報告する。昼食は、沖津宮遙拝所近くの民宿にて予約し、通常料理とは別に刺身を注文した。一般的な刺身の2倍程度の肉厚で切られており、刺身自体もプリプリとして食べ応えがあった。何よりも、海を見ながら、波の音を聞きながら、海風に当たりながらと食事を取り巻く環境も素晴らしかった。また、大島港渡船ターミナル前で食べる事ができるのがフィッシャーマンキッチンの「漁師サンド」である。「宗像大島名物:宗像大島の漁師直送地魚フライ」が謳い文句であり、手軽に美味しく食べる事ができる。

5. フィールドワーク後の活動状況

地域学・地元学としての「宗像学」は一度限りでは無く、継続していく事にその必要性及び重要性がある。本講座実施の目的は、学生らが自分たちの生活する地域のひとつである宗像に関する知識と経験を得ることである。また、本講座にて得る事ができたそれら知識及び経験は、学んだ証として学内外に示す必要がある。本フィールドワークに参加した各学生の具体的なまとめとしては、本フィールドワークでの活動をもとに、大島の魅力・課題を明らかにする映像作品を作成(プロジェクト研究II)、各自の考え・思いをレポートにまとめ、宗像学3への具体的な課題の提示(ゼミナールIII)、そして韓国観光客を大島へと迎え入れる事を前提に、情報や案内の充足確認(プロジェクト活動II)である。

この中においては、大島をPRする映像制作活動が最も大きい成果を示すことができたので、ここに紹介する。前述の通り、本映像制作は情報処理学科の学生が中核となって取り組んだ。但し、制作担当の学生だけで全ての作業を完結できたのではない。各学生の事前調査結果を踏まえた取材計画の立案から、フィールドワークでの役割分担、フィールドワーク後の映像作品に取り上げるべき内容についての相談や素材の提供など、前述のeポートフォリオや、フィールドワークを通じて得た学内外との繋がりを積極的に活用し、「宗像学」全参加学生の協働のもと一つの映像作品が創り出されていったのである。特筆すべきことは、フィールドワーク以後の活動は、教員が音頭を取っての授業などは無く、進捗状況管理を含め、全て学生基点による自主活動であったということである。無論、この活動そのものは正規科目(プロジェクト研究II)の成績評価に影響しないと明言している。つまり、「宗像学」が、所属や科目に縛られない学生の主体的な学習を促したとは考えられないだろうか。

完成した映像作品のコンセプトは、学生目線による大島の魅力発掘であり、自転車編・バス編・食べ物編と、これらを組み合わせたフルバージョンの4作品からなる。それぞれ、前述した今回のフィールドワークで得た知識や経験、映像素材を組み込みながら、世界文化遺産の構成資産に限らない大島の魅力を紹介する作品に仕上がった。この成果物は、前述した「むなかた電子博物館」における大島に関する特設ページでの掲載が決まっているほか、2017年9月18日(月・祝)、「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア2017 IN 福岡」～宗像会場^{*8)}にて上映公開された(図7参照)。



図7 ショートショートフィルムフェスティバル&アジア2017 IN 福岡のチラシと冊子¹¹⁾

会場である「街道の駅 赤馬館¹²⁾」は、宿場町として栄えた旧唐津街道にあり、宗像の東部地域観光拠点施設であることから、本講座の目的にも合致した場所だとも言える(図8、9参照)。



図 8 赤馬館での上映会の様子



図 9 上映後の赤馬館前にて

一方、この映像作品を制作しながら、学生らの中には観光地としての大島の課題、整備や情報の不備、漂着ゴミ問題などをどう伝えるかの悩みが生じていた。PR 動画である以上、素晴らしいところ・面白いところを積極的に取り上げたが、彼らの実際の経験から、それだけでは一面的にすぎないかとの懸念が生じたのである。このことは次節で述べる次なる活動計画の大きな動機付けとなった。

6. 今後の予定と課題

この度、本学が所在する宗像市と隣接している福津市が『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』として世界文化遺産に登録された。勿論、本フィールドワークで訪問した中津宮、沖津宮遙拝所もその構成資産の1つとして登録されている。地域学を特別講座と位置付けて推進してきた我々としては、これを機により多くの学生が大島へと渡り、更に「宗像」の理解を深めてもらいたいと考えている。

しかしながら、多くの学生が世界文化遺産登録関連箇所を訪問するだけで「地域学」とするのは、不十分だと考えられる。観光ではなく、地域理解の為の地域学である事を踏まえると、世界文化遺産関連箇所を訪問し、自

己の見聞を広める事の他に、地域の人間としての活動が必須ではないだろうか。今後、世界各地から訪れるであろう国内外の観光客に対して、世界文化遺産関連箇所と共に、宗像の、そして大島の素晴らしい景色も併せて堪能して頂きたい。つまり、世界文化遺産だけでなく、その地域周辺も含めての「宗像」をどのように捉えるかも地域学の一つと思われる。

上記を踏まえ、「宗像学3」の実施計画としては、今回のフィールドワークにて多くの学生が指摘していた馬蹄岩周辺（北西部海岸）の漂流ゴミの撤去を活動の主とする予定である（2017年11月もしくは12月に実施の予定）。漂流ゴミの問題は、学生自身の実地体験に基づいた気付きであり、かつ、行政・地域等が様々な理由により着手していない課題であることは、学生の主体的な活動に対する動機づけとして大きく期待できると思われる。そのほか、潮の流れが速く船が付け難いと現場の環境での清掃活動は、学生のマンパワーを最大限に生かせるものとも言えるだろう。また、これらを単に清掃活動として終えるのではなく、その活動を通して得た知見のまとめや、学生からの社会的な問題提起を促した上で、それらについて地域の方々と直接対話できる場を設定していきたい。これらの活動を経て、地域の課題を我が事として語るという姿勢を涵養できればと考えている。

最後に、特別講座「宗像学」全体の企画運営は、宗像市との協働活動に長く関わってきた本学教員によるボランティアグループが中核となつてなされ、各回の企画に応じて、適宜、本学学科及び事務組織をはじめ、宗像市及び関係団体等による支援を受けて実施されている。つまり、特定の科目や組織を表に立てないことにより、社会的な事象や学生の状況等を踏まえた、柔軟・迅速な企画運営の実現を図っているのである。このような体制は、地域連携のスタートアップとして有効ではないかと考える一方、「宗像学」全体の責任統括部署が存在せず、毎回の企画ごとに実施体制や関係団体等が変化することで、講座全体の一貫性を失わせ、場当たり的な対応となることが懸念される。本学のケースは、小規模短大であり、教職員間の連携が自然に行われたことで上述の問題を回避しているが、この活動をスケールアップする場合には別途検討が必要であろう。

引用文献

- 1) 北濱幹士・宮川幹平：特別講座「宗像学」の報告，東海大学短期大学紀要，vol. 50，pp.87-91（2016）
- 2) 宗像大島>宗像大島のこと調べてみよう
<http://munakataoshima.com/gakushu/information.html>
- 3) 宗像市 HP：市営渡船大島航路
<http://www.city.munakata.lg.jp/w050/040/040/050/050/0050/201501270633.html>
- 4) 宗像市 HP：大島観光バス「グランシマール」について
<http://www.city.munakata.lg.jp/w045/20170414141213.html>

- 5) 宗像市立大島小学校・大島中学校 HP
<http://www.city.munakata.lg.jp/school/s020/030/010/20160629111310.html>
- 6) 一筆柿右衛門
<https://sites.google.com/site/ozawashinya/elearning/kakiemon>
- 7) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群>宗像大社中津宮
<http://www.okinoshima-heritage.jp/visit/nakatsumiya>
- 8) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群>宗像大社沖津宮遙拝所
<http://www.okinoshima-heritage.jp/visit/yohaisho>
- 9) FUKUOKA FILM COMMISSION>大島・砲台跡
<https://www.fukuoka-film.com/locate/242/>
- 10) 福岡県観光情報>福岡県全域>福岡エリア>風車展望所
<http://www.crossroadfukuoka.jp/event/?mode=detail&id=40000006170&isSpot=1>
- 11) Facebook 街道の駅 赤馬館より引用
- 12) 街道の駅 赤馬館：<http://www.akamakan.info/>

注

- *1 大島中学校男子バレーボールクラブは、過去2度福岡県大会優勝の実績を誇る。
- *2 当日のドローン空撮は技術的な問題が生じたため見学できなかった。なお、当日以外に撮影されたドローン空撮映像について後日提供を受け、情報処理科による映像制作の素材の一つとして活用された。
- *3 西日本新聞社 宗像市局支局長 今井 知可子
- *4 東海大学新聞 編集部 橋 恵利
- *5 日本経済新聞社 西部支社編集部 伊藤 仁士
- *6 宗像市世界遺産登録推進室：係長 尾園 博保，主任技師 岡 崇
- *7 沖ノ島は、島全体がご神体とされている。従って、一般人の立ち入りは禁止されている。また、沖ノ島で見聞きした事を口外してはならない「不言様（おいわずさま）」、全裸になり海中で穢れを祓う「禊（みそぎ）」、島から「一木一草一石たりとも持ち出してはならない」などの禁忌によって受け継がれてきた長い歴史がある。
- *8 ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 2017IN 福岡～宗像会場 2017年9月15日（金）～18日（月）@赤馬館，鎮国寺，グローバルアリーナ